

発達には認知、特徴づけ、限定の3段階があり、日本ではいまだ多くの群集が特徴づけの段階におかれていて、これらを限定の段階に進めることが、今後の群集記述の重要な仕事であって、群集は現実の姿においても、そのもつ意味においても限定されねばならない」とお教え下さった。さらに組成表を理解しやすくするために、混合生育群を表から除くけれども、混合林分についても十分とりあげて論じなければ、日本の植生の全貌を体系的に明示することは

できないとお訓しになった。そして、日本の植生単位の成立分化を植生地理学の立場からも論じる時が到来したようだとお述べになった。これらのことは植生学を志すものの指針となるであろう。

先生の業績は筆紙をもって語りつくせるものではないであろう。しかし、先生の御意志が多くのご研究者に引き継がれることは確かである。先生の突然の御逝去を悼み、謹んで御冥福をお祈りする次第である。

鈴木時夫先生の思い出

大 木 正 夫

私が中学5年のとき千葉生物学会に入会したてのとき研究発表の際に誰れにでも気のつかなかった点をていねいに指摘され教えていた先生がいた。その後大学に入って林学を専攻して何を研究しようかと考えた。その頃戦争で森林が大量に伐採されて荒れており、早く復旧するにはどうすればよいか、遺伝学的に育種をして早く大きな木を作るには私の一生を通してでもできることではない。それならばまず、適地適木を考えなければならない。生態学を研究することがよいと考え、或る日鈴木先生に相談した。先生はそれはよいことであり、いつでも来なさい。東京大学農学部森林植物学教室にいるから、ついでに土曜日と日曜日はだめで、それは農業をしなくてはならないので困るといわれた。

私は手はじめに学校の近くにある多摩丘陵の植生調査をした。貧乏学生であるから土曜日と日曜日はアルバイトをしなければならなかったが、休講の日など山に出かけてはポツポツ調査をした。

多摩丘陵は千葉県などと違ってカシ類が極相になるであろうからカシ類のあるところで調査したら復元植生が明らかになるからと教えられて、カシ類のあるところで調査をしていた。先生に一度山を見ていただきたいと話したら、一度見てあげようといわれ貴重な一日の土曜日をさいて来ていただいた。

私が先生にこの多摩丘陵のシラカシはどうも一列に並んでおり、人間が植えたものでないか、先生もシラカシは植えたものかも知れないといわれた。そのとき百草園（もぐさ）の山頂部にシイの残存林があり、やはり大木君も、多摩丘陵も房総半島と同じようにシイ林になるようだねといわれ、シイのあるところを探して調査をしたらと教えられた。その日の調査を終り、府中市のケヤキ並木の下にあった屋

台のラーメン屋でワントンを先生からごちそうになり、生態学の話をしていただいた。先生は当時一つのことを聞くと十のことを教えて下さった。

その後尾瀬ヶ原、月山の調査に連れて行かれ、現地で教えていただいた。尾瀬ヶ原の調査のさいに富士山の青木ヶ原の調査をしたらどうかといわれ、卒業論文には青木ヶ原を調査したが、十分調査を終了しないで卒業してしまった。

その頃になると、先生に4つのことを聞いても一つぐらいしか教えて下されなく、あとは君自身で考えなさいといわれた。そのときは非常につらかったがあとで考えてみると、一人立ちするためには自力でやりなさいと教えてくれたことだと思い、よい先生に教えていただいてよかったなあと今でも思っている。

千葉生物学会の例会で銚子の犬吠崎に行ったときである。先生は誰れにでも親切に教えてくれる方でこの草は何か、これはラセイトソウで、海岸近くに生育するもので、潮風の当たるところでは葉が厚くなる。よく注意して観察をするとよい。それから君たちも草や木ばかりでなく、そのうちコケ類や地衣類までも研究するようになり、やがては石を採集するようになりますよと小中学生に話されたことを今でも思い出します。そのとき一番あとからついていった私が、今は土壌や石を採集するようになっている。

先生から何を教えていただいたのであろうか、細いそれぞれの問題ではなく、十分に観察をしなさい。そのことによって道は開けてくることを教えられた。

鈴木先生は今でも私の中であって、いつでも手を取り足をとって教えて下さっている気がしてならない。私は、よい先生をもって幸せであると思っている。